

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：24506

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770208

研究課題名(和文) 大学における英語学習者のライティングによる語彙評価ツールの開発と運用

研究課題名(英文) the development of vocabulary rubric for english learners in japan

研究代表者

金志 佳代子(kinshi, kayoko)

兵庫県立大学・経営学部・准教授

研究者番号：20438253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の大学・短大における英語学習者の語彙習熟度とプロダクトとの関係を明らかにし、語彙評価のための評価項目を作成することを目的としている。まず、本研究で使用する語彙テストの信頼性を検証した結果、語彙テストと一般に用いられる英語能力テストとの信頼性を確認することができた。次に、語彙テスト、ライティング・サンプル、質問紙調査より得られたデータ結果を分析し、英語学習者の語彙を評価するのに有用な項目を作成した。またこれらの評価ツールの具体的な指導法、運用方法を検証し、今後、教室での指導者・学習者双方が利用できるツールへの改善に取り組んでいる。

研究成果の概要(英文)：The research investigated the relationships between learners' proficiency in vocabulary and their writing. First of all, the researcher examined the reliability of vocabulary practice tests, which proved to be reliable in that there were positive correlations with other commonly used vocabulary tests. In order to develop the rubric for evaluating learners' vocabulary, the researcher analyzed the results of the vocabulary test, writing samples, and questionnaires. In addition, the researcher examined the teaching method for using the rubric, which will enable both teachers and learners to use it as an instructional tool throughout Japan.

研究分野：英語教育学

キーワード：語彙 ライティング 評価ツール

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語学習において語彙は重視されているものの、英語学習者が語彙力を増進させるために必要な語彙数を確定することは困難である。新学習指導要領で学習するよう求められている小学校・中学校・高等学校卒業時までの語彙数(約2,500語)も、英語教育の研究で報告されている語彙数(例えば、読み物の理解には3,000-5,000語)には及んでいないのが現状である。

(2) 語彙指導において、今までいくつかの語彙リストが作成され、また学習者の語彙知識(語彙の広さ・深さ・流暢さ)を測るテストが開発されてはいるものの、今の英語学習者の語彙力を向上させるための具体的な手段・評価方法にまで示唆する研究は少ない。また、学習者の認識語彙と発表語彙の隔たりは大きく、学習者が学んだ単語を発表語彙として使えるようになるまでには、様々な学習方策を考える必要がある。

(3) 学習者が自らの語彙知識に対して「気づき」を経験し、自律的かつ自立的な学習者へ成長するためのツールとして、学習者のライティングから語彙の習熟度を測る必要がある。すでにいくつかの評価ガイドライン(ループリック)が開発され、広く利用されている。これらの評価項目には、たいてい「語彙」が含まれているものの、その内容は使用語彙の多様性や適切性について言及されたものが多い。また、語の選択や語の使用域といった内容は、あまりに一般的で教室での特定の目的を反映することができないという一面もある。

以上のことから、日本の大学の英語授業で教員・学習者にとって使いやすく、また日本人英語学習者特有の語彙使用に基づいた客観的で多元的な指標が必要であると考えに至った。

2. 研究の目的

(1) 日本の大学・短大における英語学習者の習熟度とプロダクトとの関係を明らかにする。

(2) 研究目的(1)で得られたデータ結果をもとに、教員・学習者が使用できる語彙評価のための評価項目を作成する。

(3) 評価項目を語彙力促進のために教室で活用する方策を探り、自律的かつ自立的な学習者育成のため、語彙指導ツールとして運用する方法について探る。

3. 研究の方法

(1) 調査対象となる英語学習者に対して、語彙テストとC-Testを実施した。C-Testとは、Klein-Braley (1985)によって提唱された有

効かつ総合的な外国語能力を測るテストとして、今日も多くの教育現場で利用されている。このC-Testの結果と語彙テストの結果を比較することによって、学習者の語彙力が総合的な英語力と深く関連していることが明示されるとともに、学習者の発表語彙力を把握することが可能になる。

(2) 英語学習者のライティングを用いて、学習者の使用語彙の分析を行った。ライティングは10分間のTimed Writingを用いて、学期始めに1回、学期末に1回の計2回実施した。第1回目の作文テーマは“Self-introduction”(自己紹介)、第2回目の作文テーマは“Many students choose to attend schools or universities outside their home countries. Why do some students study abroad? Use specific reasons and details to explain your answer”(海外で学ぶことについて)であった。いずれのライティングも辞書は使用せず、手書きで行われた。

(3) (2)で得られたライティングは、英文語彙難易度解析プログラムを用いて分析を行った。その結果をもとに、語彙使用に関する英語学習者の共通点を見出し、語彙を評価するための評価項目を新たに開発した。また、質問紙調査を実施し、学習者の語彙学習に対する学習動機を調査した。

(4) 開発した評価項目は、教室において教員・学習者双方が利用できるツールとして機能しうることを検証した。特に、学習者にとって自分の語彙使用に対する「気づき」を促す指導ツールであることを示すものとして有効であることを示唆する。

4. 研究成果

(1) 調査対象となる参加者は、関西地方の大学1・2年生45名であった。まず、学期始めと学期末にC-Testをそれぞれ1回(計2回)行った。学期始めと学期末に行ったC-Testの結果は以下のとおりである。

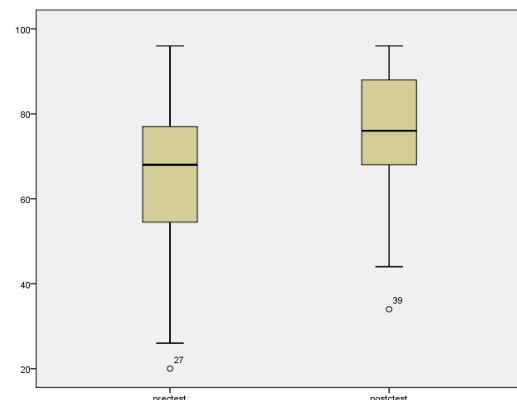


図1 C-Test(プレ・ポスト)の箱ひげ図

図1は、C-Test (プレ・ポスト)スコアの分布図である。左は学期始めのプレ・テスト、右は学期末のポスト・テストを示している。図1より、プレ・テストと比較して、ポスト・テストの中央値は高く、また箱下のひげ部分がより短くなっていることから、プレ・テストで低いスコアであった参加者が、ポスト・テストでは向上したことを示している。

(2) さらに学期中の10週にわたって語彙テストを10回実施した。以下、図2は語彙テストの平均点をまとめたものである。

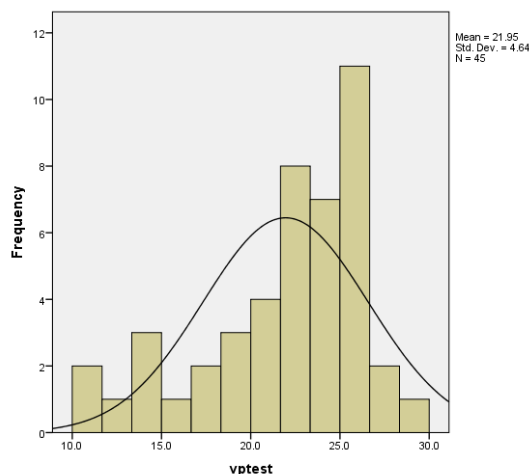


図2 語彙テストの平均値

語彙テストの結果が正規分布をなしているかに関して、尖度は -0.928 、歪度は $.354$ となり、ともに正規性の範囲内におさまっていることが確認された。

(3) (1)、(2)の結果をもとに、C-Test (プレ・ポスト)と語彙テストの相関を出したところ表1のようになった。

表1 C-Test と語彙テストの相関

	Pre-C-Test	Post-C-Test	VP Test
Pre-C-Test		.621**	.477**
Post-C-Test			.625**
VP Test			

** . Correlation is significant at the 0.01 level (2-tailed).

表1よりC-Test (プレ・ポスト)の相関は比較的高く(=.621)、語彙テストとC-Test (ポスト)との相関がより高い(=.625)結果となった。さらにクロンバックのアルファ係数は、比較的信頼性の高い結果(=.71)を示した。以上より、語彙テストとC-Testには信頼性があると確認され、また学期末には参加者のC-Testスコアが伸びたことを示した。

(4) C-Test、語彙テストを受けた同じ参加者45名のライティング(プレ・ポスト)を分析した結果、プレ・ライティングの平均文長は9.8、平均語長は4.1、平均語彙レベルは1.02、平均語彙レベルの標準偏差は1.08となった。一方、ポスト・ライティングの平均文長は14.3、平均語長は4.7、平均語彙レベルは1.14、平均語彙レベルの標準偏差は0.82となり、いずれの項目においても、プレ・ライティングと比べてポスト・ライティングでの数値が改善されていることが明らかになった。さらに作文の読みやすさの指標となるリーダビリティについては、プレ・ライティングは2.8、ポスト・ライティングは7.9となり、かなり易しい(too easy)程度から平均(average)にまで難易度も上がっていることが示された。また、質問紙調査より、学期中の語彙テスト、ライティング活動をとおして、参加者の語彙学習に対する学習動機・意欲、さらに使用語彙についての意識が高まっていることが確認された。

(5) (4)の結果をもとに語彙評価項目の作成にあたった。ESL Composition Profileは、英語学習者のライティングを評価するためのルーブリックの1つとしてよく知られている。これによると、次のとおり詳細な評価項目が設定されている(Read, 2000)。(a)書き手のアイデアを伝えるため適切に語が使用できているか、(b)ライティングの文脈に沿って特定の語が選択でき、且つ使用できているか、(c)語形は正確であるか、(d)語の使用域は適切であるか。上記の分析的評価を用いての評価項目は、詳細である一方、各項目の説明が長く複雑であるため、評価に時間と労力をかけてしまうという一面がある。さらに、「(c)語形」については、語彙の項目として評価するのか、文法の項目として評価するのかについての議論の余地がある。次に、Kinshi, et al.(2011)によるライティングの評価表「ルーブリック 2009」は、ESL Composition Profileの複雑さを改善したものである。この評価表での語彙は以下のような項目に分けられる。(a)多様な語や表現が使われている、(b)語や表現の選択は適切である。評価表は分析的評価に基いたものであるが、評価項目は「語の使用域」と「語の選択」の2つのみであり、その他の語彙に関わると思われる項目は評価できないことになる。したがって、本研究では、参加者のライティングを分析した結果をもとに、以下のような評価項目を新たに設定した。(a)幅広いレベルの語が使用されている、(b)文脈に応じた適切な語が選択されている、(c)(語の言い替えなど)さまざまな語や表現が使用されている。(a)は語の難易度を考慮したものであり、例えば「JACET 8000 英単語」のうち1000ワードレベル以上の語彙が使用されているかなど、評価者がその目的に応じて評価できるように考慮した。また(b)、(c)の評価

項目については、基本的には「ルーブリック 2009」と同じではあるか、「文脈」や「語の言い替え」といった詳細情報を追加した。開発した評価項目は、教室において教員・学習者双方が利用できるツールとして機能しうることを検証し、その結果については、論文にて公表する予定である。

<引用文献>

Kinshi, K., Kuru, Y., Masaki, M., Yamanishi, H., Otoshi, J., Revising a Writing Rubric for Its Improved Use in the Classroom, *LET Kansai Chapter Collected Papers*, 13 巻、2011、113-124

Klein-Braley, C., A Cloze-up on the C-Test. A Study in the construct validation of authentic tests, *Language Testing*, 2 巻、1984、76-104

Read, J., *Assessing Vocabulary*, Cambridge University Press, 2000

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

金志佳代子、Analysing the Reliability of Vocabulary Practice Tests, 人文論集、査読無、Vol. 50、2015、pp. 101-115

6. 研究組織

(1)研究代表者

金志 佳代子 (KINSHI, Kayoko)

兵庫県立大学・経営学部・准教授

研究者番号：20438253